

岡山大学法学部政治学講座共同企画「新しい法学部像と政治学教育」

## 政治学教育のポテンシャル——千葉真氏に聞く

千葉 真 (国際基督教大学社会科学科教授)  
聞き手 小田川 大典 (岡山大学法学部助教授)

### 問い直される政治学の有意性

小田川 数年前の日本政治学会で「誰のための政治学か?」——政治学教育の意義と方法」というセッションがありました。残念ながら私は参加できなかったのですが、冷戦の終焉、そしてグローバル化の進展などを背景として、ここ数年の間に、政治学の研究教育が社会において果たすべき役割というものが、あらためて問い直されるようになったと思います。岡山大学法学部においても、学部改組や法科大学院構想等に刺激されるかたちで、これからの法学部における政治学教育の位置づけをどうすべきかという問題が議論されるようになりました。そういう流れを受け、このたび講座として、政治学教育の今後を考えるためにも、現在この問題についてどういう議論がなされているのか、若干の整理を試みる必要があるのではないかと話になり、表題のような共同企画を始めることになりました。ただ、政治学講座といっても、岡大法学部の場合、国際政治

もあれば、政治過程論もあるし、行政学、政治社会学、政治史、政治思想史と非常に多岐に渡っている。専門が違えば当然意志疎通も難しいわけで、正直、どういうかたちで議論を進めていけばよいのか、かなり悩んだわけですが、政治学教育のこれらを考える場合、専門の違いを越えて、共通のトピックとなるものがないわけではない。たとえば近年注目されているものとしては、「公共政策」という概念を挙げる事ができると思います。単なる私的な利害の総和とは一線を画す「公共性」、それに実践的な「政策」との関わりというところ、この概念は担っているように思われます。

たとえば、この「政策」という言葉について、立命館大学政策科学部の初代学部長であった山口定さんは次のようなことを述べています。従来、我が国においては、いわゆる「政策問題」、つまり現下における政策課題をどのように捉え、それに具体的にどのように取り組むべきかといったことを生産的に考えていくという視点が不十分であり、あったとしてもせいぜい行政の

側の、いわば「上から」の「政策」だけであった。しかし、世界的転換を迎えつつある今、こうした「政策的な思考力を一般市民が持たなければならぬ時代が訪れつつある」として、そうした一般市民にも要求される「政策マインド」を、①「臨床医」的「分析力」、②「政治家」的「調整力」、③「建築家」的「総合力・構想力」というふうに整理して、そういう「政策マインド」を持つ「政策人」の育成こそが、政治学教育の課題だというふうに述べておられます。些か抽象的な議論であることは否定できませんが、私はこの「政策マインド」を持った「政策人」の育成という視点は政治学教育の今後を考える上で実に示唆的だと思います。

無論、そこには陥穽がないわけではない。「公共性」が過度に「行政の側からの」つまり「上からの」ものになりがちな我が国において、「公共政策」を論じることには或る種の危険性が伴わざるを得ません。従って、この「公共政策」という言葉を用いるにしても、もう少し「我々の間にあるもの」として深めていく必要があると思います。

このように公共政策の理念について議論しながら「新しい法学部像と政治学教育」の方向性を考えるためには、やるべきことはあまりにも膨大にあるわけですが、まず今回は、我が国において、「公共性」を「水平的な」我々の間にあるもの」として捉え、いわば「公共活動論」とでも呼ぶべき理論を展開しておられる千葉眞先生にお越しいただき、政治学教育の可能性についてお聞きしたいと思います。

千葉先生は、現在、ICU(国際基督教大学)で西欧政治思

想史、政治理論の研究教育に携わっておられるわけですが、まず、大学で政治学を学ぶことがどういう意味を持つかなどという難しい話になるので、話をわかりやすくするために、先生ご自身がどのようなかたちで政治学に関わってきたか、お話をただけしないでよろしいでしょうか。

千葉 大学に入る前は、宮城の出舎から上京して、世田谷の春風学寮というキリスト教の男子学生寮から早稲田高等学院に通ってました。熱心な野球少年でした。学寮には修士課程が終わるまで九年間いたのですが、そこで幾つかの出会いがあったんですね。まず、創設者の道正安治郎先生。この先生は内村鑑三と塚本虎二のお弟子さんにあたる明治生まれの気骨あるクリスチャンなのですが、この方からは日曜毎の元氣な聖書講義等を通じて、寮生は薫陶を受けました。政経学部への進学を考えていて、政治学科と経済学科のどちらにしようか迷っていたのですが、政治学科を勧めてくれたのも道正先生です。なぜ政治学かといえば、それはやはり政治学が、当時は少なくとも経済学に比して、倫理的なものに関わりの深い学問だったからです。高度成長期で、どちらかといえば経済学科の方が人気はあったんですが。

また、春風学寮はもともと大学生と大学院生のための学寮だったということもあって、個性的かつ勉強熱心な先輩も少なからずいるわけですね。勉強会や読書会に加えてくれて、ギリシア語もそこで習いました。

そういう学寮で、人生の問題についていちばん悩む時期を過ごしたわけですが、高校三年生のときに大病を患って、二カ月

ほど死線をさまようことになりました。何とか大学に進めることになりました。大学では、政治思想史や政治哲学の本を読んできました。

### 政治学を大学で学ぶということ

小田川 どういう学部時代をお過ごしになったのでしょうか。

千葉 ちょっと学生運動が盛んだった時代で、四年間のうち、授業があつたのは二年半ぐらいでしたか……。政治運動に熱心な友人も多くて、僕はノンポリだったんですが、運動に熱心な友人には「お前、政治のことわかってないのによく運動なんてやれるな」なんてことを言っていました。逆に「千葉は政治に関心があるくせに、なんでノンポリなんだ」と言いかえされてましたけど。

ただ、今から振り返ると、そういう状況の中で、政治とは何かとか、暴力とイデオロギーの問題を真剣に考えさせられましたね。学生がマルクスやレーニンにいかれているのを見て、内田満先生は政治過程論の授業で「暴力に頼らない政治というものもあるのだ。学生諸君はそのことを考えてくれたまえ」とかおっしゃってましたが、暴力に依拠しない政治の可能性ということには強い関心がありました。ノンポリではありましたが、学生集会などでは、「授業料払ってるんだから、勉強する権利を奪わないでくれ」とか発言していました。まだ冷静な議論をする余裕のあつた時期でしたね。「破壊せよ」というのが、破壊した後の社会の青写真を見せてくれ」とか言っていると、「それはブチアールの発

想だ」とか言われましたけど。

大学がストライキで授業がないことが多かったものですから、非公式の勉強会や読書会で先輩から多くのことを教わりました。喫茶店を何軒も梯子して、いろいろ文献を読むわけです。ロックの『統治論』とかセイバインの『ヒストリー・オブ・ポリティカル・セオリー』等、原文で読みました。それと、ドイツ語が読めないと駄目だと言われて、先輩の大学院生の指導を受けながらウェーバーの『プロ倫』（プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神）等のドイツ語原文を読みました。主たる古典は仲間と喫茶店で勉強したわけです。そして、それが大学院へ進学して勉強するきっかけになりましたね。

小田川 特に関心を持って勉強なさったことはありますか。

千葉 今から思うと、私の場合、政治思想に入ったのは、キリスト教への関心からかなあ、と思うことがあります。高橋三郎という方が『福音信仰の政治性』という本を書いています。ちょっと学部学生になりたての頃に、政治と宗教の問題をどう考えたらいいのか悩んでいたときに読みました。高橋先生は、ボン（ツァー）の「究極のもの」(Das Letzte)と「究極以前のもの」(Das Vorletzte)と、この概念を使ってこう言うことを書いてるんです。宗教とは超越的なもの・絶対的なものとの「垂直的」な関わり（「究極のもの」）であり、政治はその一歩手前の「水平的」な問題（「究極以前のもの」）であるが、人間は、「究極のもの」だけでなく、「究極以前のもの」にも取り組まなければならない。政治という「究極以前のもの」の存在意義を認めつつも、それを相対化することを忘れてはいけません。僕は目から鱗

が落ちたような気になりました。政治思想史がますます面白くなると同時に、キリスト教倫理の分野にも強い関心を持つようになったんです。

**小田川** よくお使いになる「垂直性／水平性」という二分法にはそういう背景があったんですね。いわば「超越的な絶対者と人間との関係Ⅱ垂直性」と「現世における人間同士の関係Ⅱ水平性」ということかと理解いたしますけれども。

**千葉** 富田光雄先生、飯坂良明先生、大木英夫先生のものを読み出したのもこの頃です。キリスト教と政治という問題を深めていくことで得られる、政治を絶対化する事の危うさという洞察は、当時の政治的ラディカリズムの問題点を浮き彫りにしてくれました。つまり、目の前にある政治的な現実をどう理解し、どう受けとめるべきかというようなことを自分なりにはっきりさせることが、つまり自分なりの理論的な構えができたということですね。

**小田川** 特に印象に残っている授業はあるでしょうか。

**千葉** 政治的には保守的な立場をとられていたけれど、トクヴィル『アメリカのデモクラシー』の全訳をなさった井伊玄太郎さんの講義は面白かったですね。言葉の端々から、長年の研究の中で培われた見識が滲み出るような講義で、ときどき、はつとさせられるようなことをおっしゃるんです。ナシヨナリストイックな発言をなさるから、運動やってる学生からは「引込め！」とか野次が飛ぶこともありましたが。

早稲田では非常勤でしたが、渋谷浩先生の政治学演習には熱心に出席していました。イギリス自由主義の歴史についての文

献を、毎回三頁ぐらいずつ、かなり緻密に読んでいくんです。少人数でしたが、真面目に出てた仲間がいて、授業が終わると、渋谷先生、喫茶店で議論につきあってくれました。

それと、当時まだ三十代半ばだった藤原保信先生がシカゴからお帰りになったところで、学部三・四年向けにホップズについての講義をされたんですが、これが面白かった。

**小田川** ちょうど藤原先生が『近代政治哲学の形成——ホップズの政治哲学』（早稲田大学出版局、一九七四）を発表される前のお話ですね。

**千葉** 藤原先生のお話には、いつも「危機の時代の政治理論」という問題意識があって、刺激的でしたね。

松本三之介先生の日本政治思想史も熱心に聴きました。明治の政治思想家というのは魅力的なんですね。特に内村鑑三、新渡戸稲造、福沢諭吉、中江兆民、徳富蘇峰。こんな順序で読んでいきました。明治期のキリスト教、そして、当時の明治時代人の抵抗のナシヨナリズムに関心がありました。これは後知恵になるんですが、彼らには公共精神と呼べるようなエートスがあるんですね。たとえば内村鑑三には、魂の救済だけではなくて、政治的実践につながるような思想があるわけです。内村は『後世への最大遺物』の中で述べています。自分がどれほどのこの地球を愛し、どれだけこの世界を愛し、どれだけ自分の同胞を思ったかという「記念物」(Memento)を残していこうではないか、と。

**小田川** 宗教的な「垂直性」だけでなく、政治的な「水平性」への視座が内村鑑三にあったということでしょうか。御論文「内

村鑑三——非戦の論理とその特質<sup>1)</sup>では、晩年の内村の非政治性に批判的に言及されておられますね。

千葉 たしかに晩年の内村は非政治的な傾向を見せるのですが、若い頃の内村には公共精神というものをはっきり見て取ることができると思います。

僕は、政治学の魅力の一つはここにもあると思うんです。つまり、最近、「自分探し」というようなことがよく言われるけれど、自分の中をいくら掘り下げてみてもだめで、他者との繋がりがなければ、「自分探し」も虚しいものになってしまいますね。大衆社会の中で失われたアイデンティティを求めたのであれば、それは他者と関わり合いながら、世界の中に自分をどう位置づけるかということを考えなければなりません。そういうことを学問を通じて行えるという魅力が政治学にはあると思います。

小田川 アーレントが『人間の条件』第三節で示している「不死／永遠」——市民が行為を通じて政治的共同体の記憶の中に残ることを意味する「不死」と、哲学者が観照によって辿り着く「永遠なるもの」の経験——という区別を踏まえるならば、若き内村の『最大遺物』は、まさに「不死」を論じたものであったということですね。

### 留学と大学院進学

小田川 そうすると、宗教的な「垂直性」と政治的な「水平性」というか、キリスト教倫理への関心とアーレント的な政治理論への関心というのは、ある意味で、先生の中では、かなり早い

段階から、密接に結びついていたわけですね。現在、アーレントという政治思想家は大変注目されていて、何人もの若手が競って研究しているわけですが、先生がアーレントを読み始めたきっかけというのは、どういうものだったのでしょうか。

千葉 修士課程の一年のときに、内村鑑三奨学金（内村スカラシップ）の給付を受けて、アメリカのアーマスツト大学に学部三年生として留学する機会を得ました。一九七二年だったと思います。そこで二年間、相当しごかれました。アメリカの学生の勉強量というのはすごいです。あと体力も。週五日は朝から晩まで勉強で、週末は寝ているような感じでした。ちょうどベトナム戦争の頃で、現実の社会との緊張関係の中で政治思想を勉強したのですが、そのときにジョージ・ケイティの授業でアーレントについて聴いたのが最初です。

小田川 『インナー・オーシャン』のケイティです。

千葉 そうです。モラリスティックなアーレント解釈をする方なんです。当時アーマスツト大にいらっしやっただけです。後に、プリンストンに移りました。アメリカの大学では政治思想史の「通史を古代ギリシアから現代までかなり網羅的にやります。毎週テキストを五十頁から百頁ぐらいは読まされたでしょうか。二学期で完了するように、この学期は古代ギリシアからマキアヴェリまで、次の学期はホップスからアーレントまでという具合に、きっちりやりました。ケイティはまだ若かった頃で、そこで聴いたアーレントは面白かったです。でも、当時は、アーレントをちゃんと読めていなかったと思います。本格的にアーレントを読んだのは、二度目のアメリカ留学の時、一九七八

八三年頃で、プリンストンのシェルドン・ウオリンの大学院の授業やセミナーにおいてだったと思います。

### 生活者市民の形成

#### ——政治学教育の課題と「出口論」

小田川 政治学教育の社会的役割という、実に論じにくい問題に戻りたいと思いますが、この問題が頻繁に論じられるようになった背景というか、政治学教育をめぐる議論の現状について、どういった認識をお持ちでしょうか。

千葉 公共性とは何かという問題や、いわゆる「新しい市民社会論」が盛んに論じられるようになったことには、それなりの歴史的な必然性がある、そういう状況に政治学が積極的に応答するということは十分にできると思います。この現在の状況に対して政治学が持ちうる有効性といったことを論じるとすれば、国民国家の政治学から新しい市民社会の政治学への転換という大きな流れの中で、権力批判の政治学と共通普遍追求の政治学の関係をどう考えるべきか、といったことが頭に浮かびます。この関連で、僕は、「生活者市民」の形成ということに政治学が大きく寄与できるのではないかと思うのです。つまり、生活世界に根ざしたネットワークの中で公共世界について思考し行動する市民といえますか……。

小田川 『公共哲学』5 「国家と人間と公共性」所収の論文でおっしゃっていたことですね。「生活者市民」すなわち「生活世界に「生活の座」を置いている普通の人々であるが、私的な利益

追求を行うと同時に、公的世界の動向に対しても関心を寄せ、自分なりの意見と判断を有し、必要とあれば、政治についても声をあげ、直接間接に政治参加をおこなっていく意志を持つ私のおよび公的存在<sup>15)</sup>」。

アーレントならば「私的な利益追求」を排除しなければ「公的世界」を維持することは困難であると反論するところでしょうが、千葉先生は両方必要だというお考えですね。先生の整理に従えば、従来の「市民社会論」は、経済的な観点から「市民社会」を捉える「ヘーゲル・マルクス主義」的な「市場モデル市民社会論」(第一類型)であったのに対して、「一九八九年東欧革命」以降に盛んに論じられるようになった「新しい市民社会論」は、国家だけでなく、市場からも独立した、ある意味で「共和主義」的な「公的領域モデル市民社会論」(第二類型)である。この類型に従うと、先生の「生活者市民」というのは、いわば両者の折衷案というか、第三類型になるわけですね。

千葉 僕はマイケル・ウォルツァーの「複数性の領域」としての市民社会論<sup>16)</sup>が重要だと考えています。「新しい市民社会論」は、市民社会を単なる「ブルジョア社会」としてではなく、「市民的公共性」の領域として捉え直した点において、画期的な考え方でした。しかし、ハーバーマスの「公的領域」モデルは、市民社会を、理想的な公共の言説と活動の展開の場として一面的に理解しており、これでは現代市民社会の両義性をうまく捉えられないのではないかと。つまり、そこには、市民社会それ自体が、種々の矛盾や分裂、抗争や対立を宿す領域、さまざまな差別や格差、抑圧や排除、不均衡や非対称性に満ちた領域である

という事実が不当に隠蔽されてしまふ危険性があると思います。それに、共和主義的な「公的領域」モデルの設定する「有徳な市民」の概念はあまりにも規範的で、たとえば現代日本社会の状況を勘案すると、あまりにもハードルが高すぎるのではないのでしょうか。

それに対し、ウォルツァーは市民社会を、多種多様な利害やイデオロギーが共存する広汎な「複数性の領域」として捉えます。彼によれば、市民社会とは、国家から独立した「非強制的な人間のアソシエーションの空間」であり「家族、信仰、利害、イデオロギーのために形成され、この空間を満たす関係的なネットワーク」である。市場を含む人々の非強制的な行為や関係のネットワークをすべて包摂する「種々の枠組みからなる枠組み」。それが彼のいう市民社会です。市民社会のとらえどころのない錯雑として実体を浮き彫りにするためには、僕はウォルツァーの「複数性の領域」モデルが重要だと思えます。

そして、この「複数性の領域」としての市民社会を支えるエリートとして、僕は、閉鎖的なナショナリズムではなくて、一種の共和主義的な「世界への愛 amor mundi」、たとえば石橋湛山の小日本主義に見られるような「パトリア主義」をもっと大切にしなければならぬと考えています。

**小田川** 愛国心をどう教えるかというような、些か面倒な問題でしょうか。

**千葉** 愛国心を大学で教えるということは不可能だし、不適切でしょう。愛国心の概念には余りにも負の遺産がこめられています。「パトリア主義」は、閉鎖的な集団主義とは違うものです。

阪神・淡路大震災のとき、神戸に学生とボランティア活動に行ったのですが、昼間はボランティア活動をしながら、夜は皆で金子郁容さんの『ボランティア』(岩波新書、一九九二)を読んできました。被災者の救護という具体的な公共活動の中で育まれる連帯感と、被災者の方々に対する「コンパシオ(共感)」というものが、ボランティア活動を内側から促し駆り立てていたように思いました。

**小田川** 様々な現場で、具体的な問題に取り組みさせる中で、公共精神を陶冶することが、政治学教育において重要であると、無難にまとめればそういうことになるでしょうか。先生がなさったのは、ボランティア活動を取り入れた、いわゆる「サービスマス・ラーニング」ですね。それと、御論文の中で先生が「コンパシオ」を「普段着の公共感覚」と言い換えているところは非常に興味深いです。「コンパシオ(共感)」とは、相手に対する理解と感情の交流を含む、ある種のコミュニケーションのことですから、ひとりよがりな「感傷」「同情」「憐れみ」の一方通行とは全く違う。

**千葉** ウェーバーは政治家の条件を「情熱」「責任感」「判断力」に求めましたが、時代的な制約もあって、それは統治者ないし政治家、支配する側の「情熱」「責任感」「判断力」と理解される傾向にありました。現代の生活者市民は、これらを、具体的な、各人の生活世界の営みや公共活動の中で身体化していかなければならないと思います。まさに「普段着の公共感覚」ですが、政治学教育もこのことを踏まえる必要があるでしょう。

**小田川** ベイナーが『政治的判断力』で展開している政治哲学

の構想です<sup>29)</sup>。ただ、公共活動ということ前面に出される場合に、「生活者市民」の「生活者」というのがやはり気になるんです。「日々の生活に埋没して、自分の身の回りのことしか考えられない、想像力の貧困な私生活主義者」という印象を受けるのですが、これでは公共活動という言葉が示すのは逆ですね。

**千葉** たしかにその通りです。ただ、「公共性」とか「市民」だけだと、仕事や家庭生活、友人関係、消費や余暇といった日常生活と切れてしまいます。各人各様のローカリティ(現場)と日常生活に根ざしていることが大切なんです。日常の生活世界の問題から出発するんだけど、単なる小さな家庭や職場の現場に閉じこもるだけの受け身ではなくて、そこを出て、より広い社会に出ていって、公共世界への積極的な参加者としてのものを見る習慣を育てなければならぬ。高島通敏さんの「生活者」概念です<sup>21)</sup>。敢えて「生活者市民」という表現を用いるのは、おっしゃるような「私生活主義者」と区別するためです。

**小田川** 生活者市民の形成という課題を、政治学教育が背負わなければならないという指摘は非常に重要だと思います。

それでは最後に、非常に論じにくい問題なのですが、いわゆる「出口論」については「意見がうかがいたいと思います。「出口論」というのは、大学教育のあり方を、卒業後の具体的な進路との関係において問題にするという、従来あまり見られなかった議論の立て方ではありますが……。

ICUの場合を例に、人材の育成という観点から、大学における政治学教育の可能性についてお考えになつていることがあ

ればお願いします。

**千葉** 「出口論」というのは難しいですね。余り有益な話ではなさそうにありませんが……。ウェーバー的な「情熱」「責任感」「判断力」を持ち、公共精神を身体化した実務家を育てることが、政治学教育の重要な課題だと思います。公務員、NGOやNPOの職員、それにジャーナリスト……。ICUの場合ですと、国際公務員志望の学生が結構いますね。国連などの国際機関や国際NGOの職員にはICU出身者が少なからずいるはず

です。

**小田川** 外国語教育の果たす役割が大きいですね。一年次で週十コマのELP(英語教育プログラム)、それも「読む・話す・聞く」だけではなくて、英語でエッセイを書かせ、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション……。専門科目の二〇%は英語でなされるとか。国際関係論のゼミ紹介も読みましたが、アメリカに本部のある自然保護団体の日本支部代表の方の講演から始まって、中間試験、プレゼンテーションと非常に充実しています。そのまま海外の大学院に進学する学生も多いようです。

**千葉** とにかく、教室では「さあ質問しなさい」と威勢のいい外国人教員から迫られるので、学生は必死で考え、議論することを勉強させられます。現実の具体的な問題について、自分の意見をちゃんと述べ、きちつと議論できないと駄目だと思っんです。そういう訓練が実際の様々な交渉において生きてくるのではないのでしょうか。

**小田川** 現実の具体的な問題について、自分で考え、他人と議

論するという訓練が、結局のところ、様々な実務の場においても生きてくるといふことなのかもしれないね。もちろん、語学をはじめ、様々なスキルを身につける必要があるにしても、どうもありきたりな結び方しかできませんが、政治学教育の可能性について、非常に多くのヒントを頂けたように思います。どうもありがとうございます。

(1) 本稿は、政治学講座の企画として二〇〇二年七月二二日にこなったインタビューに、小田川の責任において編集と註を加えたものである。御多忙中にも関わらず、ご協力下さった千葉先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(2) ちば・しん。一九四九年生れ。『現代プロテスタンティズムの政治思想——R・ニーバーとJ・モルトマンの比較研究』(新教出版社、一九八八)、『ラディカル・デモクラシーの地平——自由・差異・共通善』(新評論、一九九五)、『アーレントと現代』(岩波書店、一九九六)、『デモクラシー』(岩波書店、二〇〇〇)等。専攻は西欧政治思想史・政治理論。

(3) 日本政治学会研究会(於同志社大学、一九九八年十月二二日)の共通論題。司会は山川雄巳(関西大学)、報告は石川捷治(九州大学)、小林良彰(慶應義塾大学)、真淵勝(大阪市立大学)、討論は河田潤一(大阪大学)、中村研一(北海道大学)「敬称略、所属は当時のもの」。

(4) 我が国の政治思想研究の分野に於ける注目すべき動向

としては、佐々木毅「政治思想研究の有意性への問いかけについて」『政治思想学会会報 JCSPT Newsletter』第十一号(二〇〇一年一月)、および加藤節「政治思想研究の有意性について」『政治思想学会会報 JCSPT Newsletter』第十五号(二〇〇二年十二月)を参照。尚、両者は政治思想学会のウェブサイトに公開されている。  
<http://www.soc.nii.ac.jp/jcspt/letter.html>

また、教育の分野においても、最近出版された教科書の一つには次のような記述を見ることができる。「本書の主題は、政治について論評し、また政策のあるべき姿を構想するさいに参照しなければならない準拠枠もしくは価値観である。……「なぜ我々が政府の政策に(それが誤ったものに思えても)従わなければならないのか……」「(国家と何ものかが対立した場合に)一体どちらの側に正当性があるのか……」「なぜ多様な人間が一つのルールに服さなければならないのか」「善き市民であることと善き人間であることは矛盾するか」「政治は目的なのか、それとも何らかの価値に奉仕する手段なのか」……共同体に生きる人間である限り、このような問いからのがれることはできないのである。問いかけ自体が不可避で普遍的と考えられる以上、「解答を過去の偉人たちに探る」とは時代錯誤である」という批判が出て、それに対し政治哲学者は容易に反論することができる(「押村高・添谷志編『アクセス政治哲学』日本経済評論社、二〇〇三、二五五―二五六頁)。こうした普遍的な問題への解答

を過去の思想家に探るといふ課題については、既に多くの言及がなされてきたといえるが、注目すべき点は、同書がその「統編」の課題として、更に突っ込んだ問題提起を行なっていることであろう。すなわち、今や「二一世紀政治哲学」は、国民国家の属地主義的呪縛を断ち切ることに、リベラリズムとの理論的対決、人類全体の保全等々の新たな課題に直面しているのであって、「これらの課題を前にして、政治思想研究の常套句であった「思想家はこう論じている」の紹介で済ますことは許されない。近代の問題性を古典の光源で照射し、近代の異常性を告発するというだけでは、もはや手遅れかもしれない。今日の政治哲学者は、問題解決のためにイマジネーションを総動員し、政策インプリケーションを呈示し、指導性を発揮するよう求められている」(同、二五七頁)。

(5) 山口定・柴田弘文編『争点・課題から学ぶ政策科学へのアプローチ——日本を考えるキーコンセプト』(ミネルヴァ書房、一九九九)、vii—viii頁。

(6) 例えば斎藤純一は次のように指摘している。「公共性」という言葉が立場を異にするさまざまな論者によって肯定的な意味でしかも活発に用いられるようになってきたのは、一九九〇年代を迎える頃からである。この言葉が肯定的な意味合いを獲得するようになったコンテクストの一つは、国家が「公共性」を独占する事態への批判的認識の拡がりである。……この動きを、「市民的公共性」の生成という仕方で要約するならば、それは、長

らく民間の次元に自発的な公共性——「つながりとしての公」(溝口雄三)——が育たないと批判され続けてきた政治文化にとつては、たしかに歓迎すべき事態ではある。……しかし、他方で公共的空間における十分な議論を経るべき重大な争点について、政府与党の意思が「市民社会」によるさほどの抵抗を受けることもなく通ってしまった事態をどのように見るべきだろうか。この点で、「市民的公共性」の政治的関心は、少なくともいまのところ、そうした争点にはあまり感応しない仕方で編成されているのではないか、という疑問ももたざるをえない。／一九九〇年代には、人々の間の次元に公共性が形成されるようになる一方で、そうした水平的次元の公共性をあからさまに蔑視する別種の「公共性」論が台頭してきた。それは、「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮である。その基本的な特徴は、「公共性」を共同体の延長においてもつばら「国民共同体」と解する点にある。それはこう主張する。「公共性」は、戦後社会において個人主義や私生活主義の野放図な進展によって破壊を余儀なくされてきた。「公共性」の空洞化に対抗するためには、「祖国のために死ぬ」覚悟を核心に含んだ市民Ⅱ公民としての徳性が、国家の教導によって積極的に涵養されねばならない。「私民」から「公民」への脱皮をはかることがこの国民共同体の課題である、と。……公共性を人々の間を超えた次元に「国民的なもの」として位置づけるこの思潮は、「公共性」(公益)を国益と

同一視し、グローバルゼーションの条件のもとで日本が国際競争に「経済戦争」に勝ち抜くことを求める経済的なナショナリズムとも親和的な関係にある。グローバルズムにはナショナリズムの再興をもって対抗せよ、という基本スタンスが共有されるわけである」(『公共性』岩波書店、二〇〇〇、一一四頁)。

(7) John Locke, *Two treatises of government*, 1690. (伊藤宏之訳『全訳 統治論』柏書房、一九九七) ; George H. Sabine, *A History of Political Theory*, 1938. (丸山眞男抄訳『西洋政治思想史』岩波書店、一九五三)

(8) 「……私は、政治上の課題を「最終的なもの」(Das Letzte)とは見ず、「一つ手前のこと」(Das Vorletzte)として抱えて来た……。『最終的なもの』あるいは『終りのこと』とは、われわれが神の前に問われる審きと救いのことである。しかし、われわれは常にこの「終りのこと」の世界に生きているわけではない。ことに政治の問題については、同じ信仰者の間においても、同一事態に対して意見や方針の分かれることが多い。つまりこれはあくまで相対的問題の領域であり、それだけにまた、冷静な批判と寛容な討論とを、必要とする世界である。「一つ手前のこと」としてこれを見ろということとは、つまり問題を相対化することに外ならない。それは裏から見れば、まさにこの相対的領域を通して、絶対的福音の世界を指向し続け、そこからふたたび立ち帰って、いわば一歩これを突き離し、一つの距離をおきつつ、政治の世界

に対処する、ということである。」高橋三郎「福音信仰の政治性」『高橋三郎著作集 第七巻 信仰と政治の間』(上)『教文館、二〇〇〇、八頁。なお、同巻には千葉氏が序文(「最終的なもの」(Das Letzte)と「一つ手前のこと」(Das Vorletzte))を寄せている。

(9) ボンヘッファー『ボンヘッファー選集4 現代キリスト教倫理』新教出版社、一九六二。

(10) 「しかしながら私にここに一つの希望がある。この世の中をズット通り過ぎて安らかに天国に往き、私の予備学校を卒業して天国なる大学校にはいつてしまったならば、それでたくさんか己の心に問うてみると、そのときに私の心に清い欲が一つ起ってくる。すなわち私に五十年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずに死んでしまいたくない、との希望が起ってくる。ドウゾ私は死んでからただに天国に往くばかりでなく、私はここに一つの何かを遺して往きたい。それで何も必ずしも後世の人が私を褒めたって欲しいというのではない、私の名譽を遺したいというのではない、ただ私がドレほどこの地球を愛し、ドレだけこの世界を愛し、ドレだけ私の同胞を思ったかという記念物をこの世に置いて往きたいのである。すなわち、英語でいう Memento を遺したいのである。……私はこの地球に Memento を置いて逝きたい、私がこの地球を愛した証拠を置いて逝きたい、私が同胞を愛した記念碑を置いて

- て逝きたい。それゆえにお互いにここに生まれてきた以上は、われわれが喜ばしい国に往くかもしれませぬけれども、しかしわれわれがこの世の中にあるあいだは、少しなりともこの世の中を善くして往きたいです。……有名な天文学者のハーシェルが二十歳ばかりのときに彼の友人に語って「わが愛する友よ、われわれが死ぬときには、われわれが生まれたときより世の中を少しなりともよくして往こうではないか」というた。……われわれもハーシェルと同じに互いにみな希望 *Ambition* を遂げようはございませぬか。われわれが死ぬまでにはこの世の中を少しなりとも善くして死にたいではありませんか。何か一つの事業を成し遂げて、できるならばわれわれの生まれたときよりもこの日本を少しなりともよくして逝きたいではありませんか〔内村鑑三「後世への最大遺物」『後世への最大遺物 デンマルク国の話』岩波文庫、一九四六、一六一―一八頁〕。
- (11) 日本政治学会編『年報政治学 政治思想史における平和の問題』(岩波書店、一九九二) 所収。
- (12) 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、一九九四、三二―四二頁。
- (13) George Kateb, *The Inner Ocean: Individualism and Democratic Culture*, Cornell University Press, 1992.
- (14) ここでの「新しい市民社会論」については、千葉真「思想の言葉——市民社会」をめぐって」(『思想』第九二四号、二〇〇二)の簡潔な整理の他、森政稔「市民社会論のリニューアルとその理論的諸問題」(『社会科学紀要』第四七号、一九九八)を参照。尚、高島通敏「市民社会」問題——日本社会における文脈——(『思想』第九二四号、二〇〇二)も有益である。
- (15) 千葉真「市民社会・市民・公共性」佐々木毅・金泰昌編『公共哲学 5 国家と人間と公共性』東京大学出版会、二〇〇二、一三三頁。
- (16) 高橋康浩訳「市民社会論」『思想』第八六七号、一九九六。
- (17) 「パトリア主義とは、国民や国家を基軸とするナショナリズムとは異なる団体的絆の原理であり、むしろそれは共和主義原理を基礎とする「世界への愛」(amor mundi)である。言葉の真なる意味でのパトリア主義は、閉鎖的で自己愛的な集団主義や愛国主義の精神とは異なる。それはむしろ、開かれた公共精神であり、みずからがたまたま属する集団、組織、共同体、共同社会、地域、国、リージョン、世界、地球へのコミットメントを意味している。」千葉真『デモクラシー』岩波書店、二〇〇〇、一〇八頁。ここで千葉が提示している「パトリア主義」開かれた公共精神／閉鎖的で自己愛的な集団主義や愛国主義の精神」という対立軸は、チャールズ・テイラーが論文「なぜ民主主義はパトリアリズムを必要とするのか」において提示した「普遍的な連帯に開かれているような種類のパトリアリズム／より閉鎖的な種類のパト

リオティズム」という対立軸と同じものだと考えられる。Charles Taylor, "Why Democracy needs Patriotism," Joshua Cohen (ed.), *For Love of Country: Debating the Limits of Patriotism*, Beacon Press, 1996, p. 121.

(辰巳伸知ほか訳『国を愛するということ——愛国主義の限界をめぐる論争』人文書院、二〇〇〇) 尚、テイラーの同論文によれば、「民主主義」体制下で生きる者にとって重要な問題は、「パトリオティズムを持つか、持たないか」ではなく、むしろ「どのようなパトリオティズムを持つべきなのか」、就中「開かれたパトリオティズムを持つべきか、それとも閉鎖的なパトリオティズムを持つべきか」ということにはかならない。

(18) 「サーピス・ラーニング」については、川上文雄「参加民主主義論者のサーピス・ラーニング論——ボランテニア学習の政治思想的基礎」『政治思想研究』第三号、二〇〇三を参照。尚、昨今の「ボランテニアという生き方」の唱道について批判的分析を試みたものとしては、中野敏男『大塚久雄と丸山眞男——動員、主体、戦争責任』青土社、二〇〇一、第三章を参照。

(19) 脇圭平訳『職業としての政治』岩波文庫、一九八〇、七七頁。

(20) 「……本書でこれから姿を現し始める政治哲学は、政治的なものの本質を、権力・利害・支配の諸現象や、今日の政治的生活を支配する他の大半の関連事項の内には見えず、むしろ政治の本質を、言語・熟慮および判断力の

中に据える。政治的経験は、世界内に存在する特殊な様式として、言論によって構成される。すなわち、それは人類が意志疎通・討議を通して、したがって共有化の対象と間主観的判断に役立つものに関する会話を通して、自らの世界を人間的なものとする能力によって、構成されるのである。この理論的パースペクティヴは、「判断力」概念の探求によって明らかにされる。」浜田義文監訳『政治的判断力』法政大学出版会、一九八八、xii頁。

(21) 高島通敏『生活者の政治学』三一新書、一九九三。